

「鶴ヶ岡城の3D復元」～362年の時を経て蘇る～ 2020年度製作

山形県立鶴岡工業高等学校 3年建築科 課題研究「地域計画班」

石井菜央、遠藤颯斗、片桐龍騎、菅原直哉、指導教諭：柴田和彦

<歴史的なこと>

- ・天正十七年(1589)には上杉景勝、さらに慶長六年(1601)には山形城主**最上義光**の領有に帰し、このとき**鶴ヶ岡城**と改称した。
- ・元和八年(1622)に最上氏は没落し、代わって**酒井忠勝**が信州松代より転封され、以後幕末まで酒井氏の居城となった。
- ・本丸居館の建物として、承応二年(1653)中に**居間、寝間、黒書院、白書院、奥向の家、表台所**など、同三年には**味噌蔵、長局**など、そして明暦元年(1655)にはさらに広間の普請があった。つまり居館の内容が一応整ったのは明暦年間に至ってからである。本丸の**角櫓は万治二年(1659)**にできあがった。

<お城について>

- ・玄関を入ったところが御広間。御判物を警固する家臣が昼夜を分かたず詰めていた。
- ・**御礼**は黒書院、白書院、広間で行われるが、里見鞆負(ゆげい)、松平藤兵衛のような客人格、一門格の者、家老等重職の者、近習向の者は**黒書院**、組頭番頭以下惣家中、諸職人までは**白書院**、町人、大肝煎等は**広間**で御礼が行われ、黒書院が最も上位の御礼場所であり、次に白書院、次に広間の順になる。<※**居館配置の格式**について、佐藤巧氏によれば寝殿造り(貴族)は中央、書院造りやお城は、手前から左か右の奥が上位となる。>
- ・**御鈴廊下**の先は、側室や奥女中の住まい。藩主以外の男性立ち入り禁止。藩主のくつろぎの場として、**能舞台**、御遊び所などがあった。
- ・現大鳥居の辺りに馬出しの大手門があった。中御門は「榊形門」、内北御門と外北御門が「馬出し曲輪」というつくりになっていた。城門には、敵の侵入を食い止める工夫が凝らされている。
- ・**天守閣がない訳** ⇒ 中世の城は、軍事優先であったが近世には権力の象徴となった。一国一城制など幕府の築城規制が厳しい中、譜代大名の酒井忠勝は、幕府への配慮から天守閣を造らなかったと知られる。
- ・**本丸乾角櫓**は北西隅の土墨に聳え、元禄8年(1695)の改築図面によると石落とし仕掛けもあった。また、二の丸東南にあった異角櫓は承応3年(1654)築で、現在の市役所交差点に位置していた。さらに南西角のものは御金蔵で、たびたび盗賊が侵入していたとのこと。
- ・**復元**は、万治2(1659)年以降の状態を示す**本丸居館図**とその**外観透視図**(佐藤巧氏復元)を基に、広間棟、白書院棟、黒書院棟などの梁間間隔と下屋について、木構造骨組みの基本構成に則って再現した。

<城の周りのこと>

庄内藩主となった酒井忠勝は鶴ヶ岡城を居城と定め、その石高にふさわしい城造りを行うと共に、城下町としての鶴岡の町割に着手した。

内川で**最も古い橋**は、慶長十三年(1608)に架けられた三日町橋(今の**三雪橋**)で、その後、荒町橋(今の**大泉橋**)、五日町橋(今の**千歳橋**)、十日町橋(今の**鶴園橋**)、七日町橋(今の**神楽橋**)が架けられた。

荒町の左岸には「酒田船」の船着場があり、酒田との間で物資の輸送が行われていた。

- ・今の南高テニスコートの所には、藩主が馬術を稽古したり家臣の武芸を検分する「御馬場」があり、「御茶屋」という休憩所が設けられていた。
- ・市民プール付近は「**百間堀**」で鶴なども飼育され、「松原」が風致を添えていた。

参考文献

1. 「復元大系日本の城第1巻」北海道・東北:P62, P63 鶴ヶ岡城本丸平面図、鶴ヶ岡城本丸復元絵図、佐藤巧(東北大名誉教授)、発行1993年、ぎょうせい版
2. 鶴ヶ岡城のあらまし: 致道第30号 H6.2 発刊、秋保良(鶴岡市郷土資料館)著
3. 鶴岡市史資料編 庄内資料集22「図録 庄内の歴史と文化」: P28~43, H8.1.25 鶴岡市史編纂会
4. 「城下町鶴岡」: 大瀬欽哉著、H7.7.15 第4版、発行者 庄内歴史調査会 鶴岡印刷株式会社
5. 週刊「藤沢周平の世界 05」P22, 23 鶴ヶ岡城本丸: 朝日ビジュアルシリーズ、30、出版 朝日新聞社初版2006/1/1